

「居心地の佳いすまい」を設計し、  
持続可能な家づくりを考え、実践する。

菅家太建築設計事務所  
<https://kanketadashi.com>  
東京∞北海道

この冊子は、これまでの家づくりをとおして感じた疑問や問題を見つめ直し、  
これからの家づくりをどのように考えていいたらよいかをテーマに、  
菅家太建築設計事務所が不定期に刊行する冊子です。

これからのすまい  
vol. 7  
2021年9月発行  
© 2021 TADASHI KANKE  
写真：菅家太建築設計事務所（別途記載のあるものを除く）

表紙：この住宅に用いられた材料や構法の特徴がよく表れている出隅の柱まわり。  
(設計：菅家太建築設計事務所 / 施工：齊田工務店)  
(北海道北斗市)



これからのすまい

菅家太  
建築設計  
事務所

vol. 7

# 手段としての 木組み

文 齊田 綾（大工）

協働している設計者から「なぜ手で刻むのか」というややこしいお題を出されたので、以前自分のブログに載せた文章を掘り返して考えてみたい。以下、大工齊田のブログ（「大工がいなくなる日」2012年6月28日）より

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ある日の3時休憩の会話。私（37歳）と、もう一人の大工Nさん（50代）と、薪ストーブ屋さん（40歳）の3人で、現場の話になった。

「足場屋はあんちゃん（兄ちゃん）ばっかりだ」という話から、「現場で若い大工に会わない」という話になった。50代の大工さん曰く、「現場で俺が（大工の中で）一番若いことなんてざらにある」と。

そうかもしれない。私は基本的に下請けには入らないので、他所の大工さんと一緒にになることが少ない。でも、他の職方さん達（左官・設備・板金など）は、いろんな現場に入りしているので、いろんな大工を知っている。

そういう職人に聞いても、やはり若い大工がないという。以下、会話を若干脚色して再現。

**薪：**なんでだべ。

**N：**そりや、稼げないからだべさ。

**薪：**確かに。昔は現場に出れば手取り早く稼げたからね。

**私：**それに、今、大工になろうっても、取ってくれるとこ少ないんじゃない？

**薪・N：**確かに。

**薪：**若い子を育てるような余裕は無いよね、実際。

**私：**うん、無いわ。全然無い。それに、育てようなんて思ってる人も少ないし。

**薪：**だけど、あと10年したら、大工足りなくなるよ。

**N：**いや、10年もしないよ。あと5年で半分くらいになるんじゃない。

**私：**確かに、今60～65くらいの大工、多いもんね。

**薪：**そしたら、誰が家を建てるの？

**私：**建てるだけなら、建つんじゃない。



上：自ら手掛けた住宅の前で話をする齊田綾さん。次の見開き：玄関ポーチの小屋組み。地域の山から出てくる原木は、長さ4m以下が標準。この長さは梁通しの架構をつくるには決してやり易いとは言えないが、齊田さんの手掛ける住宅には、この梁材を使って梁通しの架構をつくるための工夫が随所に見られる。（北海道檜山郡厚沢部町）

プレカット、大壁ならたいして技術なんていらないしょ。大工っぽい人連れてくれば形にはなるよ、とりあえず。

N：まあ、今のは和室も作らないし。 そういうえば俺もここ最近作ってないわ、和室。

私：たしかに、作っても大壁和室っていうか、ただ畳敷きの洋間っていうか・・・、そういうの多いよね。

薪：そういうや、うちにも和室って無いわ。

私：ま、和室だけでないけど、階段もプレカットが多いしょ、今は

N：そだ、ほとんどプレカットだわ、今は

薪：なしてよ？ 大工が階段掛けないでどうすんのさ？

N：だって、そんな手間つかないから。高くなるべき、俺等作つたら。

薪：そういう問題？

私：確かに、大工手間を削る事考えたら、そうなるって。

薪：でも、あれじゃない？ 増改築なんかも大変じゃないの？

N：そだ。 直す方が大変だわ。 昔の家を直せる人がいなくなる。

私：確かに。 っていうか、もうだいぶ少ないと思うけど。

薪：大工さんって、良い仕事なのにね。

N：でも、昔に比べたら良い仕事も無くなつたつて。墨付けもなければ和室も階段もないから。ま、楽だけど。

私：墨付けしなくて、刻みもなくて、和室も階段もなかったら、大工じゃなくてもいいっしょ。

薪：じゃ、今の大工って何なの？



N：大工は大工だべさ。

私：大工っていうか、木工事の作業員って感じじゃない？

薪：なるほど。で、どう違うの？

N：一人で全部できるかどうかじゃない？

薪：全部って？

私：墨付け刻みから造作まで。

N：ううう。

薪：それって大工ならみんな出来るんじゃないの？

N・私：いやいや、みんなじゃないでしょ。だって、今の大工なんて刻んだこと無い人ばかりだよ。

薪：齊田さんは？

私：俺はわざわざ刻めるところに行つたから。

薪：じゃ、刻めなくとも別に良いって事？

私：良いかどうか分かんないけど、道具は使えなくなると思う。

N：確かに、鉛引っ張るようなことも無くなるし。鑿もそれなりでいいしな。

薪：でも、結局最後はお客さんが困るよね、大工さんいなくなったら。

N：そう思う。

私：でも、お客さんがそう思ってないからしがないしよ。

薪・N：・・・・・・

薪：いや、お客さんは知らないんじゃない、そういうこと。

私：うん、わかってないと思う。でも、予算に負けて結局そういう家を頼んで

るんだから、選んでるのはお客さんだよ。大工手間をかけるより、きれいな設備が欲しいんだもん、結局。

N：ううう。

私：合い見積もり取って安いところにやらせてれば、必ずこうなるんだよ。最初っからわかってる。

薪：ううう。確かに。それにしても、あと10年したら、どうなるんだろう。

N：大変なことになるわ、きっと。

私：うん、多分ね。

いつもより、重たい話題の休憩時間でした。

ただこれは、ホントの話です。このままだと、技術を持った大工はいなくなります。なぜなら、そういう仕事がほとんど無いから。

なぜ、そういう仕事が無いのか？技術をする仕事は手間がかかる、値段が高く付くから。そういう大工手間よりも、きれいなシステムキッチンや高性能の設備のある家を、お客さんが選ぶから。「顧客に必要とされない物は淘汰される。それは市場原理だから当たり前」というのも理屈。

ただ、少し考えてみましょう。きちんととした技術は誰のためにあるのかということを。それは、大工自身のためでもあるし、もちろんお客さんのためもあります。

でも、それだけじゃない。今、ここ



にいない人達、つまり我々の子供達の持ちうる権利もあるのです。

市場原理を適用し、今必要がないからといって一度無くしてしまえば元には戻りません。後世に残るような建物を建て、また、現在ある建物をきちんと後世に残すために、必要なのが大工技術です。もとい、技術を持った大工（職人）が必要なのです。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

以上、ブログの文章はここまで。

「今だけ、自分だけ良ければ」とい

う考えとは対極。今はもちろん、これまで、これからも。

長い時間軸の中で、これまであったものに敬意を払い、それを次の世代に伝える。その技術を繋げ残すために、無垢・木組みという手段をとっているのだと、私は考えています。◆

齊田 純（さいた りょう 大工）  
齊田工務店  
北海道北斗市

「一人で全部できる」ための道具が詰まつた齊田さんの作業場。（北海道北斗市）

# はめいた 素性の明らかな羽目板

山に生えていたヒバの木は、  
この3人の手を経て、  
住宅の天井に仕上げられました。

「代々守ってきたこの山の木を、どうにか使ってもらえないか」と山主が大工を訪ねてきたことが事の始まり。大工は使い道を考え、製材所が羽目板に加工しました。

この住宅の天井に張られたヒバの羽目板は、これ以上になく素性が明らか。山から住宅まで、材料の履歴をこれほ

ど明確にたどることができるのは、現在の家づくりの現場では稀なことです。

どこから来たのかはっきりわかる材料でつくられた家は私たちに何をもたらし、どこか見知らぬところからやってきた工業製品ばかりの家は私たちに何を忘れさせるのか。あらためて考えてみたいと思います。△



左上：ヒバを伐り出した山の山主で林業家のSさん。左下：カラマツの幼木が植わるSさんの山林。（北海道檜山郡上ノ国町 写真：齊田綾）上：羽目板の加工を担当した製材所のOさん。（北海道上磧郡知内町）右：羽目板が張られた室内で作業する大工の齊田綾さん。（北海道北斗市）



# 巡り巡って

目の前から消え、  
始末したと思っていたものが還ってくる。  
しかも、かなり厄介な問題とともに。

環境中に排出されたプラスチックゴミがマイクロプラスチックになり、いつしか私たちの食卓にのぼって体内に摂取されるように。

大気汚染防止のため、排ガス中の硫黄酸化物を石灰石に吸収させると排煙脱硫石膏が生まれる。石膏ボードに形を変えて私たちのすまいに定着し、今や処分場のひつ迫から捨てるに捨てられなくなっているように。

フロンガスを放出し、化石燃料を燃やし続け、いつしか地球規模の気候変動を引き起こして私たちの生活が危くなっているように。

夢の材料と言われたアスベストが、空気中に飛散して肺に吸い込まれ、悪夢であれば良かったと言いたくなるほどの苦痛を引き起こしているように。

目の前の材料がどこから来てどこへ行くのか。材料に対する理解は、深ければ深いほど、広ければ広いほど、そして、追いかける時間は長ければ長いほど良い。

今を吹き抜ける風も、はるか昔から吹いてきた風であり、またいつか、どこかの風になるから。合



左：整然と積まれた廃石膏ボード。このあとはリサイクルか埋立地か。（栃木県小山市）上：実生から生長したナラの幼木。家具や住宅に使えるようになるのは早くても数十年から百年後。（北海道上磯郡知内町）右：風化した納屋の外壁。土、木、竹、藁。土に還る材料でつくられたすまい。（埼玉県飯能市上名栗）

